



荒木田麗女の歴史物語『笠舎』の全体像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2019-04-01 キーワード: 作成者: 雲岡, 梓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008825

荒木田麗女の歴史物語『笠舎』の全体像

雲岡 梓

はじめに

荒木田麗女（一七三二～一八〇六）が執筆した『笠舎』は、神武天皇から安徳天皇までの八十一代の間の出来事を編年体で記す長編歴史物語である。四鏡と同様の仮託的構成で、伊勢の蓮台寺の僧房で雨宿りをする間に長寿の老人から聞いた昔語りを書き記したものとす。麗女の著作の中でも大部の書であるが、完本が現存せず、翻刻もなされていない。

本書の存在については、すでに戦前に千田憲氏が紹介している（1）。しかし千田氏が調査して以降、残存状況に変化も生じ、典拠を推測し得る新たな資料も発見されたため、ここに再度『笠舎』の全体像を詳細に提示したい。

一、成立と構成

麗女の著作の書名・執筆着手日・完成日・冊数等を詳細に記す資料、『檜垣麗女著述目録』（2）には、以下の記載がある。

笠舎 五十五局 従同年（※注・安永二年）五月廿一日
至同三年正月二十六日成

これに拠ると、麗女は四十二歳の安永二年（一七七三）五月二十一日に執筆に着手し、おおよそ八ヶ月後の翌安永三年正月に完成させている。そして冊数は五十五冊あったことがわかる。また、麗女の自伝『慶徳麗女遺稿』（3）にも、成立事情の窺える記述がある。

それより、日本紀をはじめ、我が朝の国史類、諸家の記等、又公事の書、有職の書の類をみるに、殊におもしろく、心とむるやうなりしかば、又良人、さらに仮名国史に似たらんことをも書出でよと望まるゝにより、「池の藻屑」を書きたり。是は北海先生の序あり。跋は岩垣亮卿なり。後三角先生も序を添へらる。次に「月の行方」は、野公台の序あり。（略）
笠舎五十四冊は、これも国史にならへり。

ここでは、国史や公事、有職故実の書に興味を持っていた麗女が夫の勧めによって歴史物語執筆を始め、『池の藻屑』『月の行方』に続いて『笠舎』を完成させた経緯がやや詳しく書かれている。冊数は『檜垣麗女著述目録』の記録よりも一冊少なく、五十四冊とある。なお、『池の藻屑』は後醍醐天皇から後陽成天皇までの十四代、『月の行方』は高倉天皇と安徳天皇二代の歴史を記すものである。

『笠舎』は後述する通り残欠本である。しかし、第一代神武天皇から安徳天皇までの歴史を記すことがわかり、『池の藻屑』『月の行方』に書かなかった神武天皇以降、高倉天皇以前の歴史を補う意図が窺える。ただし高倉天皇、安徳天皇については『月の行方』に書かれた時期と重複している。

『笠舎』序文は、にわか雨に見舞われた聞き手が笠舎りのために伊勢の蓮台寺僧房に立ち寄り、老翁から昔語りを聞くという、四鏡に倣った仮託的構成となっている。このため、『笠舎』という書名が付けられているのである。語りの場となっている

蓮台寺とは鼓嶽山蓮台寺で、明治二年に廃寺になり、現在の伊勢市勢田町滝口に遺構が残る。

二、諸本と残欠状況

『笠舎』は国立国会図書館に麗女自筆本が、名古屋大学附属図書館に写本が所蔵される。どちらも完本ではなく、国立国会図書館本『笠舎』（以下、国会図書館本）は巻一、二、三、四、十六、二十、二十一、二十三、二十四、二十五、二十八、三十（上）、三十三、三十四、三十六、三十七（上）、三十八、三十九、四十一、四十二巻を欠き、三十一冊が残る。名古屋大学附属図書館本『笠舎』（以下、名古屋大学本）は三、四巻を欠き、三十三冊が残る。

論述の便宜上、国会図書館本・名古屋大学の書誌を簡単に示す。

①国会図書館本

【所蔵】 国立国会図書館（請求記号：831-14）。

三十一冊が残存。

【表紙】 黒色無地。二四・一×十六・九（cm）。

【外題】 「笠舎」一題簽左肩（後補）。巻号は時代の古い順に一から三十一まで付される。見返しに自筆で記される巻数と一致していない。

【内題】 なし。

【見返し】 「廿六 武烈帝⁵／三十一 敏達天皇⁵／五」のように記される。

【書写者】 麗女自筆。

【備考】 稿本で貼紙・〇印△印を付しての書入あり。

②名古屋大学本

【所蔵】 名古屋大学附属図書館（請求記号：913.5/A/神皇）。

三十三冊が残存。

【表紙】 藍色無地。二六・〇×十七・五（cm）。

【外題】 なし。

【内題】 なし。

【見返し】 「十二代景行天皇^{ヨリ}／十六代応神天皇^{マデ}／二」のように記される。

【書写者】 不明。筆跡から見て、麗女・夫家雅ではない。

【来歴】 巻一の「丁表（遊紙）に貼紙し、「慶徳荒木田麗女著／笠舎 三十四冊／但原稿自書ハ別ニ所蔵セリ／両日庵蔵」とあり、両日庵旧蔵書であることがわかる。両日庵は幕末の明治の伊勢の書家、江川近情。

【備考】 国会図書館本の清書本。

見返しに記入される通り、『笠舎』は各天皇一代の間の出来事について編年体で記している。第一代の神武天皇以外は、「第二代の帝綏靖天皇と申奉る、御諱神淳名川耳の尊とて、神武天皇第三の皇子におはします。」と、天皇の代・諡・諱・出自を記すところから始まる。『今鏡』『増鏡』のように雅な巻題を付さず、冒頭に天皇の名称を掲げるのみであることは、『池の藻屑』『月の行方』と同様である。

国会図書館本も名古屋大学本も序文・跋文を欠くが、麗女の和文集『麗女文集 下』（4）に「笠舎序」、「同跋」が収載されることから、もともとは序・跋が存在していたことがわかる。序文に並外れて長寿の老人が登場し、聞き手に昔語りを始める場面が描かれる点は四鏡と同様である。そして物語の最後に再び老人の語りに回歸し、「此後の御代のこととはくさくさしう申さ

んよりは、増鏡など御らんじてよ。いとあきらかにまのあたり見る心ちなんし侍るぞかし、とて、さらに聞へ出ることもなし。」との一文で物語が終わることにより、麗女に第一代天皇から始めて『増鏡』に接続する歴史物語を執筆する意図があったことが読み取れる。

本文は、奈良時代頃までは一巻につき数代の記事を収め、平安時代前期の終わり頃までは、おおむね一巻につき一代の記事を収める。平安時代中期以降は一代につき上下二冊に分かれる巻が出てくる。以下、諸本の残存する巻とその内容を、見返しに記入される巻号に従って一覧に示す。

卷一五	卷一四	卷一三	卷一二	卷一一	卷一〇	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一		
50 桓武	49 光仁	48 称徳	46 孝謙・47 廢帝(淳仁)	45 聖武	43 元明・44 元正	41 持統・42 文武	38 齊明・39 天智・40 天武	35 舒明・36 皇極・37 孝徳	32 用明・33 崇峻・34 推古	31 敏達 26 武烈・27 繼体・28 安閑・29 宣化・30 欽明・	欠	欠	欠	欠	国会図書館本	
50 桓武	49 光仁	48 称徳	46 孝謙・47 廢帝(淳仁)	45 聖武	43 元明・44 元正	41 持統・42 文武	38 齊明・39 天智・40 天武	35 舒明・36 皇極・37 孝徳	32 用明・33 崇峻・34 推古	達 26 武烈・27 繼体・28 安閑・29 宣化・30 欽明・31 敏	欠	欠	12 景行・13 成務・14 仲哀・15 神功皇后・16 応神	7 孝靈・8 孝元・9 開化・10 崇神・11 垂仁	1 神武・2 綏靖・3 安寧・4 懿徳・5 孝昭・6 孝安・	名古屋大学本

卷三一	卷三〇	卷二九	卷二八	卷二七	卷二六	卷二五	卷二四	卷二三	卷二二	卷二一	卷二〇	卷一九	卷一八	卷一七	卷一六
67 三条	上巻欠・66 一条(下) ※巻三〇上・巻三〇下 の二冊に分かれ、下巻のみ現存。	64 円融(下)・65 花山	欠 ※擬古物語『山の井』と混同し、京都大 学附属図書館に『麗女世継物語』の仮題で一 括保管される。同巻一が64 円融(上)。	63 冷泉	62 村上(上)・同(下) ※巻二六上・巻二六下 の二冊に分かれる。	欠	欠	欠	58 光孝	欠	欠	55 文徳	54 仁明	53 淳和	欠
78 二条(下)	76 近衛	73 堀河(下)	71 後三条	68 後一条(下)	68 後一条(上)	67 三条	66 一条(下)	64 円融(下)・65 花山	63 冷泉	62 村上(上)・(下)	61 朱雀(下)	58 光孝	55 文徳	54 仁明	53 淳和

卷四五	81 安徳(上)・同(下) ※巻四五上・巻四五下の二冊に分かれる。	
卷四四	80 高倉(上)・同(下) ※巻四四上・巻四四下の二冊に分かれる。	
卷四三	78 二条(下)・79 六条	
卷四二	欠	
卷四一	欠	
卷四〇	76 近衛	
卷三九	欠	
卷三八	欠	
卷三七	上巻欠・73 堀河(下) ※巻三七上・巻三七下の二冊に分かれ、下巻のみ現存。	
卷三六	欠	
卷三五	71 後三条	81 安徳(下)
卷三四	欠	81 安徳(上)
卷三三	欠	80 高倉(下)
卷三二	68 後一条(上)・同(下) ※巻三二上・巻三二下の二冊に分かれる。	80 高倉(上)

国会図書館本・名古屋大学本を比較すると、国会図書館本では巻二十六、三十、三十二、三十七、四十四、四十五が上下二冊に分かれているが、名古屋大学本ではこれらは一冊にまとめられていることがわかる。国会図書館本は全四十五巻あり、上下巻に別れている冊数分を加えると、本文だけで五十一冊になる。『慶徳麗女遺稿』には五十四冊とあるので、おそらく欠けている部分に上下二冊から成る巻があり、本文だけで五十四冊あったと見られる。そこに序文一冊を加えると、『檜垣麗女著述目録』に記載される五十五冊になるであろう。これが麗女が執筆した当初の『笠舎』の原型であった。

一方、名古屋大学本では、欠けている時代に拘泥せず、残存部分の見返しに古い順から巻数を振っていることがわかる。おそらく名古屋大学本が筆写された時点で、自筆本である国会図書館本にすでに欠巻が生じていたため、筆写した人物が欠けている箇所を省き、写した順に一から三十五という巻数を補ったのであろう。その際に自筆本で上下二冊に分かれている巻も一冊にまとめられたと考えられる。また、千田氏は名古屋大学本の残存状況について、次のように述べている。

然し前に述べたように、完本の写本は見当たらず、名古屋大学本でも次の天皇の巻々が欠けているのである。上代に於いては、

仁徳・履中・反正・允恭・安康・雄略・清寧・顕宗・仁賢

の九代が連続して欠け、平安期に於いては、

平城・嵯峨

清和・陽成
宇多・醍醐・朱雀
後朱雀・後冷泉

白河・「堀河の前半」
鳥羽・崇徳

後白河・「二條の前半」

と、飛び／＼に、或部分が連続して欠けている。
この記述によれば、千田氏が調査して以降に、さらに名古屋大学本から「一条天皇上」と「六条天皇」が失われたことになる。

三、典拠について

本書の典拠について、千田氏は記事内容を分析し、次のように述べている。

「笠舎」の記事は、主として六国史を始め、その他の史書に載せられたところのものを、平易な中古文で書き下したのであって、全体に粉飾が少なく、平明暢達な文体で終止している。大和時代の記事は、「日本紀」を主とし、ついで「続日本紀」に依って文を成して、これに合わせて「旧事記」の記載を割に重く見て取扱っている。

この分析に加え、麗女夫婦の蔵書目録と思われる資料『要書目』(5)、『書目』(6)を参照すると、麗女の執筆方法がより詳しく見えてくる。

例えば『笠舎』に収録される記事が『日本書紀』に収録される記事内容と重複し、人名の表記や日付が一致する点、第十五代天皇を神功皇后とするなど、歴代天皇の皇位継承の順序が『日本書紀』に従っている点から、『笠舎』の上代に関する記述の主要な典拠は、千田氏の指摘する通り『日

本書紀』で間違いないだろう。

加えて、『書目』には、歴史物語執筆の際に参照されたと考えられる様々な歴史書等が記載されている。その中に、「神書」と題される下記の書群がある。

神書

神代卷評注	尚舎	六
同 諺解	益弘	八
同 風俗抄	信慶	十
同 合解		十二
同 塩土伝		五
同 私説		八
同 口決		五
同 直指抄		五
同 藻塩草		

右から順に、竜尚舎『日本書紀神代卷評註』、度会益弘『日本書紀諺解』、中西信慶『日本書紀神代卷風俗鈔』、清原国賢『日本書紀合解』、白井宗因『日本書紀神代私説』、忌部正通『神代口訣』、谷重遠『神代卷塩土伝』、『神代卷直指詳解』、玉木正英『神代卷藻塩草』の名が記されている。その他『日本私記』、『釈日本紀』、『日本紀通證』、『日本紀竟宴和歌』等の書名を示す箇所もある。

その一方、『日本書紀』そのものの名は見えない。『日本書紀』は江戸時代、訓点を施した寛永板本などがすでに刊行されていたが、麗女が参照していたのは、先に挙げた、読み下し文まで付された豊富な注釈書類であった可能性が指摘できらるだろう。また、主として『日本書紀』に依拠しながらも、『古事記』、『水鏡』を典拠としたと見られる記事も数箇所見られる。

次いで平安時代以降の記事について、千田氏は内容の分析により、以下のように述べている。

平安期の記事も主としては「続日本紀」「日本後紀」「続日本後紀」「文徳実録」「三代実録」「日本紀略」「扶桑略記」「二代要記」「帝王編年記」等に拠っている。

この中で、『一代要記』、『帝王編年記』以外は『要書目』、『書目』に記載がある。この外にも『類聚国史』、『百練抄』、『本朝通鑑提要』、『大日本史』、『皇年代私記』、『皇年代略記』、『歴代皇紀』、『神皇通紀』、『神皇正統録』、『皇代暦』等の通史類や、『台記』、『権記』、『春記』、『山槐記』、『玉葉』、『愚昧記』、『長秋記』、『永昌記』等の公家の日記、『備後風土記』、『豊後風土記』、『武蔵風土記』、『伊賀風土記』、『伊勢風土記』、『尾張風土記』、『駿河風土記』、『国名風土記』等の地誌類の名が見える。主たる典拠は千田氏の指摘の通り六国史が中心であるが、麗女はこれら多数の書物を博捜して、本書を執筆していたのである。

そして記述方法には、おおむね以下の三点がある。

- ①典拠とする漢文体の資料をそのまま和文体に直すもの。
 - ②典拠とする資料の記事を圧縮して、大筋に関わらない出来事や台詞、地名等を省くもの。
 - ③典拠とする資料の記事に『万葉集』等から和歌を引用することによって、物語的情趣を加味するもの。
- それぞれ例を挙げると以下の如くである(？)。

①富士山噴火と笹荷の路開通

日本逸史

甲戌、廃相模国足柄路、開笹荷路途、以富士焼碎石塞道也。

〔笠舎〕 卷十五 桓武天皇

富士焼て砂の降ぬるまぎれに、足柄の路埋れて通ひがたく成にしかば、宮荷の路開かれつれど、しばしにて又足柄の路造られき。

② 稲飯命・三毛入野命の入水

〔日本書紀〕

遂に狭野を越え、而して熊野の神邑に到り、且天磐盾に登り、仍りて軍を引き漸に進む。海中にして卒に暴風に遇ひ、皇舟漂蕩ふ。時に稲飯命、乃ち歎きて曰はく、「嗟乎、吾が祖は則ち天神、母は則ち海神なり。如何ぞ我を陸に厄め、復我を海に厄むる」とのたまふ。言ひ訖へ、乃ち劍を抜き海に入り、鋤持神に化為りたまふ。三毛入野命、亦恨みて曰はく、「我が母と姨とは、並びに是海神なり。何為ぞ波瀾を起てて灌溺れしむる」とのたまひ、則ち浪秀を蹈みて常世郷に往でましぬ。

〔笠舎〕 卷一 神武天皇

熊野ノ方にて海顔俄に波風はやく、御船たゞよひけるを、稲飯の命いたくうれたき事にし給ひ、海に入て神にならせ給ふ。三毛入野の命は常世の国に詣給へり。

③ 大津皇子の処刑

〔日本書紀〕

冬十月の戊辰の朔にして己巳に、皇子大津の謀反けむこと発覚れぬ。皇子大津を逮捕め、并せて皇子大津が為に註誤かえたる直広肆八口朝臣首樞・小山下老伎連博徳と、大舍人中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心と帳内礪杵道作等、三十余人を捕む。庚午

に、皇子大津を詔語田の舎に賜死む。時に年二十四なり。妃皇女山辺、被髪し徒跣にして、奔赴きて殉る。見る者皆歎歔く。

〔笠舎〕 卷九 持統天皇

十月二日、大津の皇子捕へられ給ひ、心よせ奉りし人ノ三十余人召とられき。又の日皇子うしなはれ給へり。廿四にぞならせ給ふ。先帝第三の皇子にて、御母は大田の皇女におはします。天智天皇ことにいつくしみ奉らせ給ひしを、皇子も思し忘れず、おとなび給ひて後、其姫皇子山辺の皇女を御妃にし給へる。此折も姫皇子は御ぐしをみだり、徒跣^{ヌッセン}にて皇子の御方に走り行給ひ、もろとも失給へり。帝も御兄弟におはしませば、さすがにいとおしう思し歎かせ給ふ。世の中にも伝へ聞て、いみじう哀に思ひ聞へ奉る。(略)

十一月、伊勢の齋宮におはします大来の姫皇子もまかで給ひ、京に上らせ給へり。大津の皇子のことを聞給ひ、哀に覚へ給へば、齋宮、

神風の伊勢の国にもあらましを
なにゝかきけん君もあらなくに

①では、『日本逸史』の記事と、内容も用いられる漢字もほぼ一致している。

②では、熊野の海で暴風によって船の制御を失った稲飯命が入水し、それを見た三毛入野命も後を追う、というあらすじは『日本書紀』の記事の通りである。しかし、『笠舎』では死を前にした二人の台詞、「神邑」・「天磐盾」という地名等が省略されている。

③では、大津皇子とともに三十余人が捕らえられたこと、

大津皇子が処刑された後、妃の山辺皇女が髪を振り乱して素足で追いつがり、殉死した⁽⁸⁾等、基本的に『日本書紀』の記述に拠りながらも、「直広肆八口朝臣音樞・小山下彦伎連博徳と、大舍人中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心と帳内礪杵道作等」の、大津皇子に味方した人物の名称は省略している。その一方で、『日本書紀』には掲載されない大伯皇女の「大津皇子を偲ぶ和歌を『万葉集』から引くことで、物語らしい趣を添えている。

このように、『笠舎』の執筆方法は、典拠への依存度が高い。しかし、その中にも物語としての読み易さへの配慮が随所に認められる。そして、本文中に麗女独自の歴史解釈や麗女の創作による独自記事の挿入は見られない。

四、執筆目的について

千田氏は本書の執筆動機について、以下のように結論付けている。

即ち此の著では、事件が細大となく生滅、継起する様相は表面的には描出せられてはいるが、それで終っている。史実の羅列で終止して、その中から大きな時代の特色だの、大きな時代の動きなどを掘む事は困難である。(略)即ち此の書に於て著者の史観と云うものを知ることは全然不可能なのである。尤も著者は初から、そんな事を念頭にしていたのではあるまい。史書によりて、史実を学び知る事を第一の目的とし、更にその知識を整理する為、筆を執る事の好きな性情とて、自己の文章として書き流して行ったのであろう。

四鏡に倣つて様々な資料をもとに和文で歴史を綴ることそのものが麗女のものである、楽しみだつたのではないかという見解であり、首肯すべきものである。

本文中に麗女独自の歴史観や思想を読み取れる箇所が見受けられないことから、歴史に独自の解釈を加えたり、批判精神を発揮することが執筆目的ではなかったことが明白である。その執筆方法が六国史等の漢文体資料を、典拠の記述に従いつつ、物語風の和文体に書き改めるものであることから、あえて言えば、麗女のものである自らの手によって第一代から第八十代に至るまでの歴史物語を四鏡に倣つて書き綴ることそのものにあつたように見えるのである。

また、麗女に『増鏡』へと接続する歴史物語を執筆する意図があつたことは先述した。福田景道氏は、『池の藻屑』と『月の行方』について、序文の構成・序文に設定される語り手の人物像・結末部分が、四鏡の中でも『増鏡』と類似していることを明らかにしている⁽⁹⁾。これらのことから麗女が歴史物語執筆に際し、特に規範として念頭に置いていたのは『増鏡』であつたと考えられる。

一方で、『増鏡』や『菜花物語』のように雅な巻名は用いず、天皇の名称を巻頭に配するという相違点もみられる。この点と、第一代天皇以前の神代の歴史に関しては、「天地ひらけて、天津祖はじめて基を起し給ひ、大八洲の国なりて天の神地の祇の御代の程、幾万の年を経侍ることにてかろくしう聞へなすべうも侍らず、唯かしこまり置ばかりになん。さるは古き書などにてもおのづから御らん得らんかし。」と記して省略している点から、麗女には天皇の年譜を中心とした天皇の系譜の物語として『笠舎』を執筆する意識もあつたのではないだろうか。

さらに、麗女には、現存未詳の『かさの雫』という全七十巻の歴史物語と思しき作品もあつたらしい。『檜垣麗女著述目録』には記載がないが、度会貞多の『神境秘事談』⁽¹⁰⁾に、「いにしへよりの歴代の治乱興廢戦争をのぶ」ものと記

されている。『笠舎』との成立の前後関係は不明であるが、題名から『笠舎』と対になる書であると考えられる。麗女は『池の藻屑』『月の行方』『笠舎』の中では戦にまつわる描写を簡素なものに留め、宮中を中心とする雅事の描写に多く筆を割いている。しかし貞多の記述を見るに、『かさの雫』ではこれらで省筆している戦の描写に力を入れたのである。第一代から第八十一代までの長期間の出来事を網羅した『笠舎』と、七十巻にも及ぶという『かさの雫』が存在したことから、歴史物語を綴ることに対する麗女の熱意が窺えるのである。

おわりに

麗女は『池の藻屑』と『月の行方』の執筆によって、四鏡における空白期間を補い、和文による日本通史を完成させたと評価されている⁽¹⁰⁾。そして麗女の歴史物語執筆の取り組みは、上記の二書に留まらず、さらに長大な歴史物語『笠舎』執筆へと続いて行く。筆の速い麗女には珍しく、八ヶ月もの時間をかけて執筆した『笠舎』は、これまで詳細に研究される機会に乏しかった。『池の藻屑』『月の行方』とは違い、歴史物語の系譜の中にも加えられていない。完本が存在が確認できず、広く流布した形跡もないことがその原因であると考えられる。

しかし、『池の藻屑』『月の行方』で歴史物語執筆の要領を掴んだ後に、満を持して第一代天皇からの歴史を書き綴った本書は、麗女の歴史物語の集大成であると見ることが出来る。麗女の歴史物語について考える上では、本書の主題や構想等も明らかにし、内容の分析を進めてゆくことが必要であろう。

注

- 1 千田憲氏「慶徳麗女の『笠舎』に就いて」(『女子大国文』一、一九五五年一月)。引用の際、漢字・仮名遣の旧字を現在通行の形に改めた。
- 2 白百合女子大学図書館蔵『檜垣麗女著述目録』(請求記号・000/464/36)
- 3 荒木田麗女『慶徳麗女遺稿』は、享和二年頃成立。本文は(大川茂雄氏・南茂樹氏編『国学者伝記集成(上)』復刻版、東出版、一九九七年九月)に拠った。
- 4 荒木田麗女『麗女文集。下』は、文化三年成立。本文は白百合女子大学図書館所蔵本(請求記号・090/464/21)に拠った。
- 5 『要書目』は成立年不明。実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館伊豆野文庫所蔵。本文は麗女の夫、慶徳家雅の筆跡。様々な書物の名称が列挙され、作者や冊数が付されているものもある。『書目』は天明三年成立。『要書目』に記載される書物とほぼ重複するが、多少の増減がある。『要書目』の成立以降に新たに入手したものを書き入れ、手元からなくなった物を削除し、再度蔵書を整理して作成した目録と考えられる。
- 6 『日本逸史』の引用は、国史大系第八巻『日本書紀私記 釈日本紀 日本逸史』(吉川弘文館、一九六五年)に、『日本書紀』の引用は、新編日本古典文学全集『日本書紀①』(小学館、一九九四年)、同『日本書紀③』(小学館、一九九八年)に拠った。『日本書紀』の引用に際しては、書き下し文のみを用いた。
- 7 福田景道氏『月のゆくへ』の輪郭・枠物語形式の継承と変容(『島大国文』三三、二〇一一年三月)、『池の藻屑』研究序説(『歴史物語の系列化と枠物語構想』(『島大国文』三四、二〇一四年一月))
- 8 度会貞多『神境秘事談』は享和三年成立。本文は神宮文庫所蔵本(請求記号・八門一三三七)に拠った。
- 9 荻野由之氏『史話と文和』(博文館、一九一八年)、芳賀矢一氏『日本文献学文法論歴史物語』(富山房、一九二八年)等に言及される。近年においては、前掲注(8)においても、主要な歴史物語作品と見なし得ることが述べられている。
- 10

〔付記〕

本稿は平成三十年度科学研究費補助金（若手研究B・課題番号：16K16757）による成果の一部である。

（くもおか あずさ／北海道教育大学准教授）